

日本語教育における親族語彙 — 初級日本語教科書の分析 —

小森 由里

1 はじめに

親族語彙は、人類学上 L. H. Morgan を先駆者として研究されてきた。人類学の分野では、親族関係というものを系譜関係によって作られた関係のネットワークと位置づけ、名称体系の重心は系譜関係の分析におかれてきた¹⁾。他方、親族語彙は日本語教育においても重要な教授項目の1つと考えられる。語彙学習の目標は、その語を正しく理解し適切に使うことができる能力を養うことである。語を理解する上で、まず問題となるのは学習者の母語と日本語とのずれであろう。各語によって語の意味領域に違いがあり、その違いの中には社会、文化的背景の違いから生じたものもある。親族語彙は、それぞれの社会においてその用法、概念の区分の仕方に違いが認められる。日本語の「兄弟姉妹」はこの漢字と対応するかたちで4つに区分されるが、英語では‘brother’‘sister’と2つに分けられるということがその一例である。このような語彙をどのように学習者に理解させ定着させていくかは日本語教育における大切な課題である。

本論では、親族語彙の観点から6種類の初級日本語教科書を分析し、日本語教育において親族語彙をどのように取り上げるか考察することを目的とする。対象学習者が異なる6種類の教科書では、学習の目的、内容にも違いがみられる。教科書を比較対照し、取り上げられた親族語の種類、導入及び練習の方法を調べ、さらにそれぞれの教科書の特性を考慮に入れたうえで、親族語彙をどのように捉えていくか探求していく。

II 親族語彙の特徴

親族は、現行民法第725条において6親等内の血族、配偶者、それに3親等内の姻族と規定されている。親族語とは、この親族関係を指し示す語であり、その総体を親族語彙と定義づけることができる。親族語の具体例として、武井(1982)が『国立国語研究所資料集6 分類語彙表』に収められている例を対象として日常一般の親族語を次の表1のように親等別に分類している。この中では「父、父上、おとうさま、おとうさん、パパ、おやじ・・・」を一括し、これを「父」で代表させ、他の語もこれに準じている⁽²⁾。

表1 親等別親族語の分類

一親等	父・母・息子・娘
二親等	祖父・祖母・兄・姉・弟・妹・孫
三親等	曾祖父・曾祖母・おじ・おば・おい・めい・ひまご
四親等	いとこ
五親等	(該当するものなし)
六親等	またいとこ
七親等	(該当するものなし)

以上の親族語に加えて配偶者を表す「夫」「妻」、また「父」「母」の総称である「両親」、「息子」「娘」の総称である「子ども」、「兄」「妹」に対して「兄弟」なども親族を表す語である。

日本語の親族語彙にはさまざまな特質がある。まず「ウチ」と「ソト」による親族語の区分が特徴の1つである。すなわち他人に対して自分の親族について言及する場合と他人の親族に言及する場合では異なった語を用いる必要があるということである。他人に自分の母親のことを話すのに「母」と言い、他人の母親については「お母さん」を使うというのがその一例である。

次に親族語彙が単に親族を表す語として用いられているだけではなく、人称詞としての機能があるということである⁽³⁾。話し手が自分自身に言及する自称詞(一人称)、話の相手を指す対称詞(二人称)、相手への呼びかけとしての呼称詞、

さらに第三者を指し示す他称詞（三人称）として用いられる。例えば母親が子どもに対して「お母さんが悪かったわ。」と1人称として親族語を用いるのは自称詞としての働きであり、子どもが母親に「お母さん！」と呼びかけるのは呼称詞、母親に叱られて目の前の母親に向かって「お母さんなんてきらい。」というときは対称詞としての用法である。また友達の母親に言及して「お母さんはお元気？」と言う場合は他称詞として用いているのである。このように「お母さん」という同じ言語形式でも、自称詞、呼称詞、対称詞、他称詞として用いることができるのである。

さらに年齢に関わる特徴がある。日本語の家族内の呼称・自称が、世代、年齢の上下によってきれいに分かれることについては、鈴木（1999）の分析がある⁴⁾。自己を中心に家族構成図を描いて、真ん中にやや斜めの線を引き上下にわけ、この分割線を基準に親族語彙に関して次のような原則を導きだしている。まず対称・呼称に関する原則として、話者は分割線より上の人を通例親族語で呼ぶが、分割線より下の人に親族語で呼びかけることはない。つまり、母と息子の間では、息子は分別線の上に位置する母を「お母さん」と親族語で呼べるが、線の下になる息子に向かって母は「息子さん」とは呼ばず、「太郎」といった名前前で呼ぶ。この原則は分別線の上下によって決まるため、例にあげた世代の異なる親子間と同様にわずかな年齢差しかない兄弟姉妹間にも適用される。わずかであろうとも年齢差を重視するというのは日本語の呼称の1つの特徴といえよう。次に自称に関する原則として、分割線の下にある相手と話すとき、自分を相手からみた親族語で称することができるが、分割線より上の者に対してはそれはできない。例えば兄が弟と話す場合、自分を「兄さん」と称することができるが、弟は自分を「弟ちゃん」とは言えない。

さらに鈴木は、用いられた親族語が使う人と相手との人間関係を正しく表していないことを虚構的用法と呼び、次のようにその用法を2種類に分け、説明している⁵⁾。

- 1) 話者が自分自身を原点として、血縁関係のない他人に対し相手がもし親族

だったら自分の何に相当するかを考え、その関係にふさわしい親族語を対称詞・呼称詞・自称詞に選ぶ。例えば若者が他人である老人を「おじいさん」、中年の男を「おじさん」と呼ぶ^⑥。

- 2) 話者と相手間の関係、続柄を正しく反映していないことばを話者が使う。話し相手が親族の場合も親族以外の他人の場合にも成立する。この第2の虚構的用法の最大の特徴は、最年少の者を規準点にとり、よびかけられる人あるいは言及される人物がすべてこの最年少からみて何であるかを表す用語で示されることである。これを鈴木は共感的同一化と呼んでいる。母親が夫を子どもの視点から「お父さん」と呼んだり、他人のこどもを「おにいちゃん」と呼ぶことがその例としてあげられる。

以上のようなウチとソトによる語の区分、人称詞としての機能、年齢に関わる特質、虚構的用法を考慮に入れ、これらが初級日本語教科書でどのように取り上げられているかを考察していく。

III 分析

1 分析対象

親族語彙の分析のために6種類の教科書を取り上げることにする。その概観は次の表2の通りである。

表2 初級教科書

教科書 [出版年]	語数	時間数	対象者	課の数	各課の構成
Introduction to Modern Japanese (IMJ) [1977]	約1550	——	一般成人	30	会話・説明・ドリル・発音・読解・聴解練習
日本語初歩 (初歩) [1981]	1400	300	海外で学習する一般成人	34	本文会話・練習・新出語・新出漢字
生活日本語 I・II (生活) [1983]	約700	——	中国からの帰国者	I : 24 II : 9	解説・会話・中国語訳・練習・関連表現

文化初級日本語（文化） [1987]	約 1800	300～350	日本での進学 を希望する留 学生	37	本文・例文・説明・練 習・発展
新日本語の基礎Ⅰ・Ⅱ （新基礎）[1990・1993]	——	約200	技術研修生	50	文型・例文・会話・練 習・問題
Japanese for College StudentsⅠ・Ⅱ・Ⅲ （JCS）[1997]	——	約300	大学生	30	Formation, Drills, Roleplays, Reading, Writing

分析の対象として取り上げた教科書は、すべて日本で出版された初級向けのテキストである。表2から、明らかなように、6種類の教科書の対象学習者は、一般成人、技術研修生、大学生などさまざまである。そのため各教科書の目的にも違いがあり、親族語彙の取り上げ方も異なっていると考えられる。以下それぞれの教科書を上記の表中の（ ）名の略すこととする。

2 分析結果

2-1 導入されている親族語

6種類の教科書でほぼ共通して、「父」「母」「兄」「姉」「弟」「妹」を表す語、つまり親及び兄弟姉妹に関する語が導入されている。ただ『新基礎』だけが「弟さん」を導入していない。続いて『文化』を除く5種類の教科書で夫婦に関する語が取り上げられている。学習対象者が一般成人であれ、学生であっても、親・兄弟・夫婦という親族関係は学習者にとって身近で重要なものであり話題にのぼることも多いため、ほとんどの教科書で導入されていると考えられる。親、兄弟、夫婦に次ぐ語として、『JCS』『生活』『新基礎』の3種類で「息子」「娘」など子どもに関する語、『新基礎』を除く2種類の教科書で祖父母、おじ、おばを表す語が紹介されている。<II 親族語彙の特徴>でも言及したように、民法では六親等内の血族、配偶者、三親等内の姻族と親族は規定されているが、日本語教育において導入されている親族語彙は、二親等内の血族及び配偶者が中心で、姻族を表す語はほとんど導入されず、導入語が限られていることがわかる。

6種類の教科書の中で、導入している親族語が最も少ないのが『文化』である。親と兄弟姉妹を表す語のみで、配偶者に関する語を導入していない。『文化』の学習対象者は日本で進学を希望する留学生で、配偶者について言及する必要がないためかと推測できるが、6種類の教科書の中で最も多い約1800の語を導入している教科書として、親族語数が限られているのは意外である。他方『生活』は中国からの帰国者を対象に、林家の人々が主要な登場人物として日本での日常生活を題材にした会話で構成されている。そのため親族語も本文中で頻繁に用いられ、他の教科書では扱っていない姻族に関わる語彙も導入している。『生活Ⅱ』5課で林夫人が夫の母を「お母さん」と呼んでいるのがその一例である。導入段階でも『生活』には際立った特徴がみられる。「おはようございます」「いただきます」などの基本的なあいさつことばと同じ『生活Ⅰ』2課で早々と親族語彙が導入されているのである。親族語彙は学習者の実生活と直結した語と考えられているためであろう。このように各教科書の特色に応じて取り上げられる語の種類、導入時期に違いがある。

導入されている親族語の中で、配偶者の言語形式に注目したい。夫婦に関する語は、他の親族語に比べ、時代や社会の変化に影響を受けやすい揺れのある語である。6種類の教科書の中では、男性配偶者を表す語として「夫」「主人」「ご主人」の3語、女性の配偶者を表す語として「家内」「妻」「女房」「奥さん」「奥様」の5語があげられている。自分の配偶者に言及する場合には「主人」「家内」、他人の配偶者に対しては「ご主人」「奥さん」という形式が6種類の教科書の中で1番多く取り上げられているが、「主人」を自分の配偶者を表す語として導入するには再考が必要である。日本語百科大辞典(1988)では「主人」という言い方は、夫婦男女同権の観点から問題であるとし、マスコミでは「女中」が「お手伝いさん」に、「老婆」が「老女」に言い換えられるようになったのと同様に「主人」という語も避けられるようになり、それに代わって「夫」が用いられていることを記している⁹⁾。夫婦関係の変化に伴い、「主人」は不快語と考えられるようになったのである。2000年6月1日の日本経済新聞(夕刊)

では自分の配偶者を「主人」や「家内」と称する代りに、精神的な夫婦の平等関係や夫婦の契約関係を表す語として「パートナー」という語が広がりつつあることを報じている。現段階で「パートナー」を夫婦に関する一般的な語として日本語教育に取り入れるのは急ぎすぎであろうが、この記事が象徴するように、さまざまな社会的背景によって生じた夫婦関係の変化に応じて、夫婦に関する語は移り変わっているということに留意し、適切な語を導入しなければならない。

2-2 導入方法

6種類の教科書の中で親族語がどのように導入されているかを分析すると、次の3つのタイプに大別できる。

タイプ1) 本文会話の中で導入：『文化』・『IMJ』

『文化』と『IMJ』は共に、親族を本文会話のトピックとして取り上げ、コンテキストの中で親族語を導入している。『文化』では第11課「私の家族」と題された本文で、タイ出身の学生が写真を見せながら自分の家族を紹介している。『IMJ』では19課で敬語と関連づけながら導入している。

タイプ2) 課の学習項目として導入：『JCS』・『生活』

『JCS』では16課の‘Objectives’の1つが‘Describing and explaining about people and things’であり、学習項目として‘family terms’があげられている。また『生活I』では2課の関連表現として親族語彙が取り上げられている。タイプ2はタイプ1とは異なり、コンテキストのないところで親族語が導入されている。『JCS』では家系図で、『生活』では表を用いて、自分の親族と他人の親族を表す場合には異なった言語形式を使う必要性を示している。

タイプ3) 文型導入のための語として導入：『新基礎』・『初歩』

このタイプでは親族語を課の主要な学習項目としては捉えておらず、その課で学習すべき文型を導入するための補助的な項目とみなしている。従って1つの課で体系だてて親族語彙を取り上げるのではなく、いくつかの課で分散して導

入されている。例えば『初歩』では16、21、24の3つの課にわたって導入されている。16課では「雨がふっています」「父は会社の社長をしています」といった「Vています」、21課では「きょうは雨がふるそうです」「天気がよさそうです」の2種類の「—そうです」、24課では「兄は子どもが2人あります」というタイトルに示される「あります」の用法が各課の主要学習項目である。このような文型を定着させるためのドリル、特に代入ドリルのキューとして親族語が用いられているのである。

以上のように親族語彙の導入は3つのタイプに分けることができる。タイプ1及び2は、親族語彙を学習すべき項目として扱っているところが、文型を重視し語を補助的に捉えるタイプ3とは異なっている。さらにコンテキストの中で導入しているタイプ1とコンテキストから独立させ家系図や表を通して導入しているタイプ2とは導入の手法に違いがある。それぞれの教科書における親族語彙の位置づけの違いが導入方法にも反映されている。

2-3 導入されている用法

＜Ⅱ親族語彙の特徴＞において、親族語には自称詞、呼称詞、対称詞、他称詞という人称詞としての働きがあることを述べたが、6種類の教科書すべてで親族語は他称詞として導入されている。『生活』、『文化』では、話者の視点から親族語彙をウチに関する語、ソトに関する語の2種類に分けて導入している。『生活』ではⅠの2課で「自分の—」、「相手の—」と分け、さらにⅡの1課で「私の—」「先生の—」と自分側、他人側とを対照させて親族語を表にまとめている。『文化』では「私の家族」、「吉田さんの家族」に分け、家系図を用いて自分の家族と他人の家族とでは名称が違うことを明示している。

『IMJ』と『JCS』では親族語彙は‘plain terms’、‘polite terms’に分けられると説明している。‘plain terms’は、ソトのメンバーに自分の家族について話す場合に用い、‘polite terms’は他の人の家族について話す場合に用いると定義づけている。

それぞれの内容は、『生活』及び『文化』のウチとソトと同義ではあるが、‘plain’, ‘polite’という区分は、待遇表現を考慮に入れたものと考えられる。特に『IMJ』は親族語彙が導入される19課から22課にかけて授受表現、尊敬語、謙讓語を集中して学習するように作成されており、親族語彙と待遇表現との関係を強調している。

< 2-2 導入方法 >でも言及したように、『新基礎』と『初歩』では文型導入のための語として親族語彙がいくつかの課で分散して導入されている。他の4種類の教科書では表や図を用い、親族語彙を整理しているが、この2種類の教科書では語彙として体系だてて取り扱っておらず、導入された用法はすべて他称詞であるが、ウチとソトの違いを学習者に認識させるような工夫はされていない。文型を積み上げて学習させることが第一の目的で、語の学習が軽視されているためと考えられる。

他称詞以外の自称詞、呼称詞、対称詞としての用法、親族語が話し手と相手との人間関係を正しく表していない虚構的用法を導入している課とその親族語は表3の通りである。(次頁)

表3から明らかなように、『初歩』『新基礎』はすべてが空欄である。つまりこの2種類の教科書の中では親族語彙の他称詞としての用法だけしか取り上げられていないということである。他の教科書の中で注目したいのは『生活』、『文化』と『JCS』である。まず『生活』ではダイアログの中で親族語を用いて呼びかける場面が設定されている。『生活II』第5課「料理(1)」では、林夫人が夫の母親を「お母さん」、林夫人の子どもの正道が林夫人を「お母さん」、正道が祖母を「おばあちゃん」、さらにその祖母が正道の父親である自分の息子を「お父さん」と呼びかけている。最後の母親が自分の息子を「お父さん」と呼ぶ例は、親族間で話者が相手を自分自身の立場からではなく、第三者の立場に自己を心理的に同一化させて呼びかける親族語の虚構的用法の一種である。この場合は祖母が家族の最年少の孫の視点で息子を「お父さん」と呼んだ例である。このような家族間の呼称について『生活II』(p150)では、虚構的用法

表 3 人称詞と虚構的用法

教科書	自称詞	呼称詞	対称詞	虚構的用法
Introduction to Modern Japanese	——	19課：お父さん	——	——
日本語初歩	——	——	——	——
生活日本語	——	II 5課：お母さん、お母さん、おばあちゃん、お父さん	——	II 5課：お父さん(他称)
文化初級日本語	19課：お母さん	28課：お父さん 31課：お母さん	28課：お姉ちゃん	24課：隣のおばあちゃん(他称) 28課：知らないおばあちゃん(他称) 28課：お父さん(呼称)
新日本語の基礎	——	——	——	——
Japanese for College Students	19課：お父さん	16課：お父さん 24課：父さん	19課：お父さん	19課：お父さん(対称)

(表中の空欄は該当する用法の実例がないことを示す)

や自分より年上の家族成員には親族語を用い、年下には「弟」「妹」などの語を呼びかけとして使わないことを説明している。『生活』では家族内の呼称を取り上げ、ダイアログの中でその実例を示し、さらに説明も加えているのである。

また呼称詞だけではなくすべての親族語の働きを取り上げているのは『文化』と『JCS』である。『文化』では、19課の買い物にきている母子の会話で、母親が子どもにたいして「お母さんが試着している間ここで待っていてね。(p 6)」と自分自身を「お母さん」と称している。28課では姉と弟の会話の中で弟が「お姉ちゃんはマフラーしか編んだことがないじゃない。(p63)」と対称詞として「お姉ちゃん」を用い、また同じ28課で「ねえ、お父さん、覚えていますか、あの店。(p64)」と夫婦間の会話で妻が夫に「お父さん」と呼びかけ、31課では息子が母親に「お母さん」と呼びかけている。さらに24課の「隣のおばあちゃん」、28課の「知らないおばあさん」は虚構的用法と考えることができる。どち

らの「おばあさん」も共に話者と血縁関係はなく、話者の視点で「おばあさん」と捉えることができる年配の女性に他称詞として言及しているのである。また『JCS』では19課の Reading で「お父さん」という同一の言語形式を用いて、自称詞・対称詞としてはたらき、虚構的用法を導入している。初級教科書では、導入する語彙数、用法に制約はあろうが、さまざまな親族語のはたらきは、日常生活の中で頻繁に使われており、『文化』、『JCS』のようにコンテキストの中でその実例を示すのは学習者にその用法を認識させる上で効果的である。

2-4 練習

6種類の教科書は初級向きのため、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4つの基本的スキルの中で、練習問題の比重が「話す」と「読む」に置かれている。そのためここでは「話す」というプロダクティブな作業と「読む」というリセプティブな作業の中で、導入された親族語をどのように扱っているかを分析する。

a) 「話す」練習

それぞれの教科書の中で親族語の「話す」練習は次の3つに分けられる。

タイプ1) 親族語を用いた文型・表現の練習：『新基礎』・『生活』・『初歩』

親族語を定着させるための練習ではなく、文型あるいは表現を練習するためのドリルのキューとして親族語を用いている。『新基礎』では文型練習のためのキューとして7課、15課、31課、41課で親族語が練習に用いられている。例えば第7課では「弟に手紙を書きます」というような「Person1はPerson2にNounをVerbます」という文型を正確に身につけさせるためPerson2の代入ドリルのキューとして「主人」「弟」などの語が使われている。同様に『初歩』でも16課、21課、24課の文型用に、『生活II』のLesson1では「――が休ませていただきたいといっているんですが」という表現練習のために親族語がキューとして用いられている。

タイプ2) 文型と同様に親族語の定着のための練習：『文化』

このタイプでは、文型だけではなく親族語にも比重をおいた練習がなされて

いる。親族語が導入された第11課で、家族の呼び方という〈例文・説明〉を経て〈発展〉で「あなたの家族について話しましょう。(p80)」という問題が用意されている。この問題では「私の家族」と題された例文を参考に、課の主要な学習項目である「Vています」という形を用いて「姉はフランスに住んでいます」「父は貿易会社を経営しています」のような文を学習者が発話できるようになることを目的としている。つまり「Vています」という形の練習でありながらも話題を親族に限定しており、親族語の定着、練習につながるといえる。

タイプ3) 待遇表現と関連づけた練習：『JCS』・『IMJ』

初級教科書で導入される待遇表現は、授受動詞及び「Vてあげる・てもらう・てくれる」、尊敬語、謙譲語が主である。6種類の教科書のうち『JCS』と『IMJ』の2種類が際立って、親族語と待遇表現を関連づけた練習を行っている。まず親族は、話者のウチに属するものとして捉えることができる。そのため親族語をキューとして授受動詞の練習をしたり(JCS 19、20課)、「やる」「Vてやる」の練習(IMJ20、22課)を行っている。さらに親族でも自分の親族(ウチ)に言及する場合と他人の親族(ソト)に言及する場合とでは女性配偶者を表すにも「家内」「奥さん」のように言語形式を変える必要があるという特徴に着目して敬語の練習を行っている。話し手と聞き手がウチ・ソトの関係にある場合、話し手は自分に関しては謙譲表現を、聞き手にたいしては尊敬表現を用いる。話し手と聞き手の親族を話題にし、それぞれの関係に応じた親族語を用いることで互いのウチ・ソトの関係を学習者に意識させ、敬語の運用を学ばせることができる。(IMJ19課・22課、JCS26課)

初級用教科書ではさまざまな文型を正確に習得することが第一の目的となり、語の習得は軽視される傾向があると考えられる。親族語彙の場合もその傾向が顕著に現れているといえよう。しかしながら親族語彙にはウチとソトによる言語形式の違いがあり、タイプ3のようにこれを待遇表現と関連づけて練習することが可能でありまた効果的と考えられる。

b) 「読む」練習

次に「読む」練習の中で親族語彙がどのように取り上げられているかを考察する。各教科書の親族語を用いた読解練習は以下の通りである。

表 4 読解練習

教科書	課	練習文の内容	練習文中の親族語
Introduction to Modern Japanese	19 21	私の家族 ジョンソンの日記	父・母・弟・妹 母
日本語初歩	——	——	——
生活日本語	——	——	——
文化初級日本語	——	——	——
新日本語の基礎	15 18 24 31 41 48	家族の紹介 趣味一車の運転 友人宅への訪問 田中さんへの手紙 山本さんへの手紙 日本の年末	家内 家内 奥さん 妹 息子さん・娘さん・娘 奥さん・ご主人
Japanese for College Students	16 17 19 22 24	アルバイトの広告 学生の作文 留学生の投書 新聞(人生相談) ことわざ辞典から	お父さん・お母さん お父さん・お母さん お父さん・お母さん 父・母 父さん

表 4 の示す通り、『初歩』『文化』『生活』は会話を中心に構成されており、「読む」練習に相当するものが含まれていない。『新基礎』では<問題>の中に読み練習が設けられている。6つの課で親族語を含む練習があるが1つの練習に含まれる語数が限られており、その代りに各課で導入された文型の定着に主眼がおかれている。「話す」練習の場合と同様に文型を中心とした練習である。また『JCS』には Reading のセクションがあるが、親族語に関するかぎり Reading は「読む」練習というよりは新しい学習項目の提示という役割を担っていると考えることができる。19課の Reading では自称詞としての「お父さん」、対称詞としての「お父さん」、虚構的用法の「お父さん」、24課の Reading では呼称詞としての「父さん」が示されている。つまり Reading は、16課で他称詞として導入された親族語を定着させるための練習というより、他称詞以外の用法を

導入するためのセクションと捉えることができる。

このような練習とは異なり、『IMJ』の読む練習は親族語彙を中心に構成されている。19課は親族語彙が導入された課であり、課の終わりの部分に置かれた<読む練習>で、これまでに学習した「Vている」「一たがっている」などと共に「父」「母」「いもうと」「おとうと」という親族語が用いられている。表4から明らかなように、1つの読解練習の中でこの19課の練習が最も多くの語を含んでおり、この練習のタイトルが「私の家族」と題されていることから「読み」を通して親族語彙の定着を意図していると考えられる。

IV 考察

1 教科書の特色と親族語

親族語彙の導入・練習について6種類の教科書の分析を行ったが、語彙の捉え方にはそれぞれの教科書の特色が反映している。『初歩』と『新基礎』は、基本的な文型を習得させることに主眼をおき、文型中心に構成されている。そのため語には注意が払われず、親族語彙も表や図などを用いて体系だてて学習させることが可能な語の集まりであるが、個別に導入し文型を定着させるためのキューとして利用している。同様に『IMJ』も文型中心の教科書ではあるが、待遇表現と親族語彙を関連させているところが特徴である。授受表現や敬語などの待遇表現が19課から22課に続けて導入されているが、親族語彙も19課に導入され、そのウチとソトの要素を活かし待遇表現と合わせて定着させようとしている。『文化』もまた文型を積み上げていく方式をとっているが、目標の1つに日本の生活で日々直面する場面でコミュニケーションができるようになることをあげている⁽⁸⁾。そのため単に主要な文型だけを取り上げているのではなく、現実的な言語使用場面も考慮に入れた結果、他の教科書では軽視されがちなさまざまな親族語の人称詞としての働きも導入していると考えられる。

以上のような文型中心の4種類の教科書と異なるのは『生活』である。『生活』は中国からの帰国者を対象に日常生活において必要な日本語能力を身につけさ

せることを主目的としており、各課も「掃除」「洗濯」「料理」という家庭生活の場面を中心とした会話から構成されている。つまり文型を積み上げていく構造シラバスではなく場面シラバスと捉えることができる。日常の家庭生活の場面では家族間の会話も取り上げられ、互いに何と呼び合うかということにも注意を向ける必要がある。そのため『生活』では親族語を用いて呼びかける日常生活に密着したダイアログも際立って多く含まれているのである。

『JCS』は、学習者が日常生活において「聞く」「話す」「読む」「書く」というスキルを使ってコミュニケーションできるようになることを目的とし、教師用マニュアルでは‘structural, situational and functional-syllabus type’に基づいていると述べている⁹⁾。『JCS』の各課には学習項目を使って実際に言語運用が行えるようロール・プレイのセクションがあり、今回の分析対象となった教科書の中では最もコミュニケーションを意識した教科書と捉えることができる。しかしながら親族語彙に関しては、『IMJ』と同様に待遇表現と関連させて取り上げており、特にシラバス上の特色は認められない。

2 中級教科書における親族語

次に中級教科書を分析し、初級と中級の教科書における親族語彙の捉え方の相違を分析した上で、初級では親族語彙をどのように取り上げていくべきかを考えてみたい。『IMJ』の中級用テキストとして『総合日本語中級』、『文化』に対して『文化中級日本語Ⅰ、Ⅱ』、『初歩』に対して『日本語中級』を分析対象とする。本稿の主旨は、初級教科書の分析であるので、ここで取り上げる中級教科書は以上の3種類にとどめることとする。

3種類の初級教科書と中級教科書を比較、分析することで、中級教科書における親族語彙の捉え方に2点特徴があることが明らかになった。まず第1に親族語が新たに導入され、初級教科書より語の種類が豊富なことである。例えば『総合日本語中級』では「おやじ」という語が導入され、男親を表す語も「父」だけではなく「おやじ」の方が適切な場面もあることを示している。このよう

に中級では単に語数を増やしているだけでなく、ある親族を指示するために何種類かの語があり、会話に関わる者の人間関係や会話が行われている場面・状況に応じてその多様な親族語を使いわけなければならないことを学習させている。第2の特徴としては、初級ではほとんど取り上げられていない用法が中級ではコンテキストの中で導入されていることである。『総合日本語中級』では呼称詞が、『日本語中級』では呼称詞と虚構的用法がそれぞれ導入されている。ただし初級の『文化』ですでにさまざまな用法を導入している『文化中級日本語』では、他称詞としての親族語しか用いられていない。

このように中級教科書では、初級で学習していない親族語を導入し、用法を補充している。しかしながら中級はあくまで初級の補強にすぎず、初級ほど語彙の導入・定着に比重をおいていない。総じて初級では「話す」ことに焦点が絞られていたが、中級では「読む」能力を高めることを目的としている。また初級の各課のトピックは日常生活に関わるものであったが、中級では社会一般的な話題が中心である。『文化日本語中級Ⅱ』においてその傾向が顕著で、「第3課 異文化間コミュニケーション」「第5課 日本の歴史」「第7課 日本人と食生活」など日本の文化、社会を広く理解するのに役立つ話題が取り上げられている。このような中級教科書の性質のため、初級の場合ほど親族語彙を取り出して学習させるようには構成されていない。従って初級の段階から親族語の自称詞、呼称詞などの用法を、学習者自身がそれを使える段階までは達しなくとも、理解できるようにダイアログの中で提示していくことが必要であると考えられる。

3 語の指導

Nation (1990) は、語を理解し使用するには次の4つの要素についての知識が必要であると述べている⁽¹⁰⁾。Form (Spoken form, Written form), Position (Grammatical patterns, Collocations), Function (Frequency, Appropriateness), Meaning (Concept, Associations) の4つの側面をそれぞれの語について学習しなければならないと指摘している。この側面を日本語の語彙にあてはめると、まず Form と

は、その語がどのように発音され、漢字、ひらがな、カタカナでどのように書き表されるかということである。2点めの Position は、どのような文型でその語が用いられ、どのような語がその語の前後にくることがあるか、またどのような語と共に用いられるか、また3点めの Function は、その語がどれだけ頻繁に用いられ、どのような場で使われているかということである。最後に Meaning に関しては、その語がどのような概念で、この語の代りとなる語にはどのようなものがあるかということである。親族語彙の主要な特徴であるウチとソトによる語の区分は、Function の特に Appropriateness に関わるものである。6種類の中で4種類の教科書では、この区分を明確にしている。しかし Meaning と結びつくと考えられる虚構的用法はあまり取り上げられておらず、また親族語の人称詞としての働きがあまり導入されていないということは、Position の指導も不十分であるということである。

Nation が示す4つの語の側面を親族語彙に関して初級の段階ですべて学習させるというのは、他の項目との学習順序や時間的制約から無理なことであろう。他方、親族語彙は日常生活に密着した語である。そのため初級の段階で学習者がその特徴を使用できないまでも理解できるよう指導することが望ましいと考えられる。親族語の人称詞としての働き及び虚構的用法をコンテキストの中で示し、親族語は単に親族を指示する語ではなく、他の働きもあることを初級の段階から学習者に認識させる必要がある。また親族語を定着させるためには、『IMJ』や『JCS』のように待遇表現と関連づけるのが効果的である。初級ではたいてい文型を学習させることが中心となり、そのため語彙に時間をかけるということはなかなか難しい。親族語彙の場合は、親族を表す語の集まりとして体系だてて学習させることが可能であり、またそのウチとソトの特徴から待遇表現と共に導入、練習することが有効的であると考えられる。

V まとめ

対象学習者の異なる6種類の初級教科書を取り上げ、親族語の導入・練習を

分析した結果、各教科書の特色に応じて親族語彙の取り上げ方に違いがあることが明らかになった。しかし一般的に初級教科書は文型中心に構成されており、語の指導は軽んじられる傾向にある。親族語彙に関しても概ね同様である。文型を積み上げる構造シラバス、場面を中心としたシラバス、コミュニケーションを中心とした教科書においても日本語の親族語の特徴を包括的には扱っていない。実際に初級教科書で親族語彙に関する特徴をすべて学習させることは難しい。しかしながら親族語は日常生活に密着した語であり、中級では親族をトピックに取り上げる機会が少ないことから、人称詞としての働き、虚構的用法をコンテキストの中で示し、また待遇表現と共に定着させることが初級段階における親族語彙の効果的な教授方法と考えられる。

注

- (1) 渡辺欣雄編 (1982) 『現代の文化人類学 親族の社会人類学』至文堂 p168-178
- (2) 武井睦雄 (1982) 「親族語彙の歴史」『講座日本語学 4 語彙史』明治書院 p116-117
- (3) 田窪行則 (1992) 「言語行動と視点一人称詞を中心に一」『日本語学』vol. 11明治書院 p20
- (4) 鈴木孝夫 (1999) 『(1) 鈴木孝夫著作集 ことばと文化 私の言語学』岩波書店 p129
- (5) 同書 p135-138
- (6) 渡辺友左 (1979) は『各地方言親族語彙の言語社会学的研究 (1)』秀英出版 p113-114
において、このような親族語を虚構的用法ではなく年齢を表す年齢階梯語と捉えている。
- (7) 林大 柴田武編 (1988) 『日本語百科大事典』大修館 p605
- (8) 文化外国語専門学校 (編) (1990) 『文化初級日本語 I 教師用手引書』文化外国語専門学校 p2
- (9) 国際基督教大学 (1997) 『Japanese for College Students : Basic Teacher's Manual』講談社
インターナショナル p8
- (10) Nation, I.S.P. (1990) Teaching and Learning Vocabulary Newbury House p31.

教科書

- (1) 『An Introduction to Modern Japanese』(1977) 水谷修、水谷信子 The Japan Times
- (2) 『日本語初歩』(1981) 国際交流基金 (編) 凡人社
- (3) 『生活日本語 I・II』(1983) 水谷修、田中望、菱沼透ほか 文化庁

- (4) 『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』(1987) 保崎優、山本真紀代、堀内みね子ほか 文化外国語専門学校
- (5) 『新日本語の基礎Ⅰ・Ⅱ』(1990・1993) 海外技術者研修協会(編) スリーエーネットワーク
- (6) 『Japanese for College Students vol. 1, 2, 3』(1997) 国際基督教大学 講談社インターナショナル
- (7) 『総合日本語中級』(1989) 水谷信子 凡人社
- (8) 『日本語中級Ⅰ・Ⅱ』(1990・1996) 国際交流基金 凡人社
- (9) 『文化中級日本語Ⅰ・Ⅱ』(1994・1997) 文化外国語専門学校日本語課程(編) 文化外国語専門学校

参考文献

- 遠藤織枝 (1989) 「不快語・不快な例文」『日本語教育』69号 日本語教育学会
- 河原崎幹夫 吉川武時 吉岡英幸 共編著 (1992) 『日本語教材概説』北星堂
- 国際基督教大学 (1997) 『Japanese for College Students: Basic Teacher's Manual』講談社
インターナショナル
- 国際交流基金 編 (1983) 『日本語教科書ガイド』北星堂
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店
- 鈴木孝夫 (1999) 『(1) 鈴木孝夫著作集 ことばと文化 私の言語学』岩波書店
- 田窪行則 (1992) 「言語行動と視点——人称詞を中心に——」『日本語学』vol. 11 明治書院
- 武井睦雄 (1982) 「親族語彙の歴史」『講座日本語学 4 語彙史』明治書院
- 林大 柴田武 編 (1988) 『日本語百科大事典』大修館
- バルバラ・ピッツィコーニ (1997) 『待遇表現から見た日本語教科書』くろしお出版
- バンFCC (1982) 「呼称の社会学—日米の比較」『日英語比較講座第5巻 文化と社会』大修館
- 文化外国語専門学校 編 (1990) 『文化初級日本語Ⅰ 教師用指導手引書』文化外国語専門学校
- 渡辺友左 (1977) 『各地方言親族語彙の言語社会学的研究 (1)』秀英出版
- Nation, I.S.P. (1990) *Teaching and Learning Vocabulary* Newbury House.

The Kinship Terms in the Teaching of Japanese: An Analysis of Textbooks for Beginners

Yuri KOMORI

Kinship and the kinship terms have attracted keen and sustained interests in anthropology. The kinship terms are also important in the teaching of Japanese. Although kinship terminology probably exists in the world's languages, it may be encoded differently in each society, reflecting on various kinship systems. The learner needs to assimilate linguistic features of kinship terms of the target language, bearing in mind the differences in their own language. This paper aims to analyse six textbooks for beginners in terms of kinship terminology and to pinpoint the problems underlying the teaching of kinship terms at the beginning level.

There are several features of kinship terms in Japanese. Japanese distinguishes between terms of their own kin and those of others' kin; the Japanese use a term '*haha*' when speaking about their own mother and a term '*okaasan*' when speaking about others' mother. A further feature is that the kinship terms can work as terms for address and as personal pronouns. The hierarchy based on age is an important factor which determines the use of kinship terms for self and for address in the Japanese family. Finally, Japanese kinship terminology entails a function as "a fictive use", in which the terminology does not accurately reflect the relationship between speaker and addressee. It is necessary to analyse how these linguistic features are introduced in the textbooks.

I wish to explore the teaching of kinship terms through examining six textbooks; *Introduction to Modern Japanese*, *Nihongo shoho*, *Seikatsu nihongo*, *Bunka shokuyuu nihongo*, *Shin-Nihongo no kiso*, and *Japanese for College Students*. Since these textbooks target different types of learner such as university students and technical trainees, it should be useful to pinpoint the different approaches to the kinship terms. The

textbooks are analysed in terms of the following issues;

- 1 which kinship terms are introduced;
- 2 how they are introduced;
- 3 which functions of the terms are taught;
- 4 what kind of practices and tasks are provided in order to internalise the forms and functions of kinship terms.

These analyses lead to the conclusion that six textbooks downplay the teaching of kinship terms since they provide the learner with a limited number of functions and terms. The textbooks mainly present kinship terms for reference rather than terms for self and for address. Moreover, the practices and tasks are designed to help the learner to produce specific sentence structures accurately, and the kinship terms are employed just as cues in drills and question-and answer practices.

These oversights of kinship terms may be connected with the syllabus type of textbooks. The four textbooks are based on the structural syllabus. This means that they highlight the significance of linguistic structures and neglect the teaching of items of vocabulary, even though they are often employed in everyday situations.

In conclusion, it may be understandable that the textbooks for beginners give priority to sentence structures, but they should provide the learner with the kinship terms in a more purposeful way. From my point of view, it is a practical approach to teach the kinship terms with the polite expressions since the terms contain a concept of 'in-group' and 'out-group', one of the crucial variables which influence the polite use of Japanese. Furthermore, it is necessary to present the distinctive functions of the kinship terms in a variety of context so that the learner can comprehend them.